

入選

「給食のおにいさん」 遠藤彩見（幻冬舎）

情報メディア学科 後藤昌好

平成26年6月に、東大阪市が13の小学校を対象として1週間を使い学校給食残量調査を行った。それによると、5日間でパンは682個、おかず282kg、ごはんが約68kgの結果であった。この統計がインターネットで取り上げられていたのを発見し、胸が痛むと共に学校給食の抱える残飯問題に対して興味を持った。そして、学校給食の残飯についての本を探している時にこの本を見つけ、残飯問題に関する本と共に購入した。

この本は、調理人としては数々の大会で入賞するほどの凄まじい技術を持つが、プライドが高く人との関係を上手く築く事ができない「佐々目宗」が、給食調理員になり、残飯などをはじめとする現場の問題に”おみくじハンバーグ”などの発想を活かし、技術精神共に成長していく青春小説である。

この本を読み最初に思ったのが、リアリティの高さである。小説を読んでいるのだが、ムシムシした空気や小学生の声といった場の表現がうまくされており、実際に現場である給食調理室にいるような錯覚すら感じるような、臨場感溢れる書き方である。また、主人公の佐々目が、どのようにすると残飯問題を改善できるかといった所で、著者が試行錯誤して考えたレシピが考えられておりとても感動した。

その中でも特に、ハンバーグの真ん中に調理した人参やゴボウなどをいれ、出てきた野菜によって恋愛運や運動運が上がるという”おみくじハンバーグ”の製作については、子ども心をくすぐる発想であり、実際に、将来自分の子どもが野菜嫌いを起こした際に真っ先に作ってみたいと思った。

ハンバーグ以外にも、生のキュウリを茹で、食感を変えて給食のサラダに使ってみるというアイデアなど、一般的な給食と発想が180度違うアイデアもあり、料理をする人は勿論のこと、身近な場所が舞台の小説で読みやすい故に、本が苦手な人にもおすすめができる本である。